

Q21 特別な教育的支援を必要とする子どもがいます。周りの子どもたちへどのように理解させていけばよいでしょうか

【支援への手がかり】

☆ 特性を理解する

保護者の了解を得ながら、本児の特性を理解する場を設けることが、必要となる場合があります。

周りの子どもたちへは、本児の苦手なことや得意なことを正しく伝え、苦手なことが「わがままやふざけ」等からきているのではなく、周りの人たちの支援が必要であることを根気よく説明します。

また、苦手さの疑似体験や説話、紙芝居などを通して、友だちの「痛み」を共感できるようにしましょう。

☆ 一人一人の「よさ」を認めあう学級・学校づくり

「みんなちがって、みんないい」の言葉通り、一人一人の個性の違いを認め、互いに受容し、一人一人の可能性を最大限に引き出すようにします。「器用さ、正確さ、速さ」など、能力的な「よさ」ではなく、「元気な挨拶ができる、友だちに優しい、小さなことでよくよしない」など、子どもの存在そのものを含めた子どもの「よさ」を見つけ、認めていくことが大切です。このような視点で子どもに接すると、どの子にも「よさ」が見えてきます。

☆ 指導者の対応がモデルとなる

指導者の言動は、周りの子どものモデルとなります。肯定的な見方や適切な対応が、誰もが大切にされていると感じられる学級づくりの基盤となることは、言うまでもありません。日々の生活の中で、子どもたちが感じていることを理解するとともに、何でも話し合える学級の雰囲気づくりをしていくことが大切です。

